

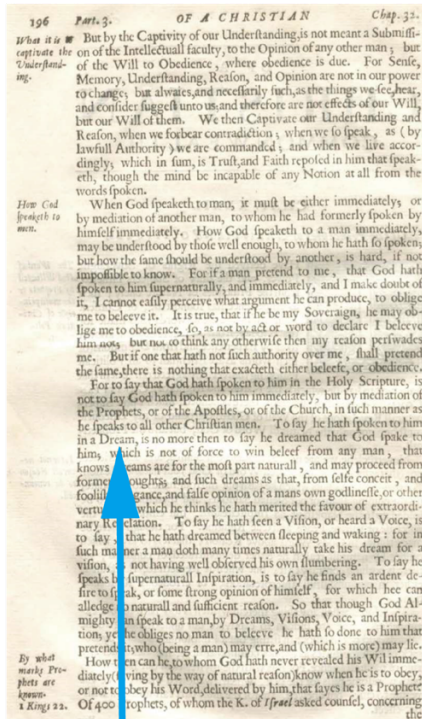
折記号が示す洋古書の姿

Old Western books indicated by signatures

高野 彰
Akira TAKANO

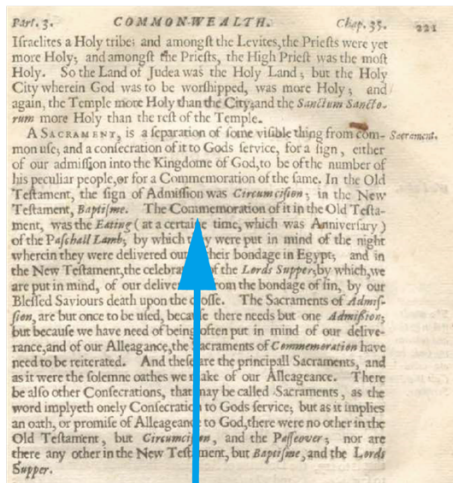
1. 序：同じ本でも異なっている

洋古書は現代本と比べると大きな違いがある。現代本は動力印刷機で刷るため、変更が見つかっても機械を止めて修正するのでは効率が悪い。組置きにしてまとめて修正するので、出来上がりが同じになる。そのため現代本はどれか1冊を手に入れば、残りの同じ本の代表になれる。



Dream

図1：繰り返し使われた活字 m
2C1' (名古屋大学附属図書館)



Commemoration

図2：繰り返し使われた活字 m
Ff2' (名古屋大学附属図書館)

それに対して洋古書は印刷工程が違っていた。洋古書は手引き印刷機で印刷し、印刷が終わると組置きにしないで「直ぐ」に解版し、活字を再利用していた(注1)。例えば、*Leviathan* (1651

年)の後半で活字「m」(図1と図2)が折丁2C-2Z1の間で使われている(注2)。同じ活字が印刷—校正—解版—組み版—印刷という順序で繰り返し使われた証拠である。従って洋古書の場合、校正は折丁ごとにすぐ行われた。そうしないと修正の機会がなくなってしまうからである。Leviathanが出版される頃、著者ホッブズはパリにいた。印刷はロンドンのトマス・ワレン(Thomas Warren)の印刷所で行われたので(注3)、印刷直後の校正は出来ない。修正や変更はまとめて提示するしかなかった。それがLeviathanのA3の裏ページにある正誤表である。ホッブズの校正は即日ではなかったが、印刷所内での校正は行われている。折記号A4の表ページでの誤植訂正がそれである。このページの見出しはイタリックでTHE INTRODUCTIONと表示する予定であったが、THEをローマンで組んでしまった本がある(図3)。間違いに気付き、THEをイタリックで組み直した本もある(図4)。それに図3では下部欄外に間違っ折記号Bを印刷してしまっているが、図4ではそれが削除されている。

もう一つ示してみよう。図5と図6はJames BurghのPolitical disquisitionsの第3巻(1775年)である。この本のK折丁の2枚目の紙葉にはK2の折記号がついている(図5)。しかし折記号が*K2となっている本もある(図6)。K2の紙葉を削除し、文章を書き替えた*K2の紙葉

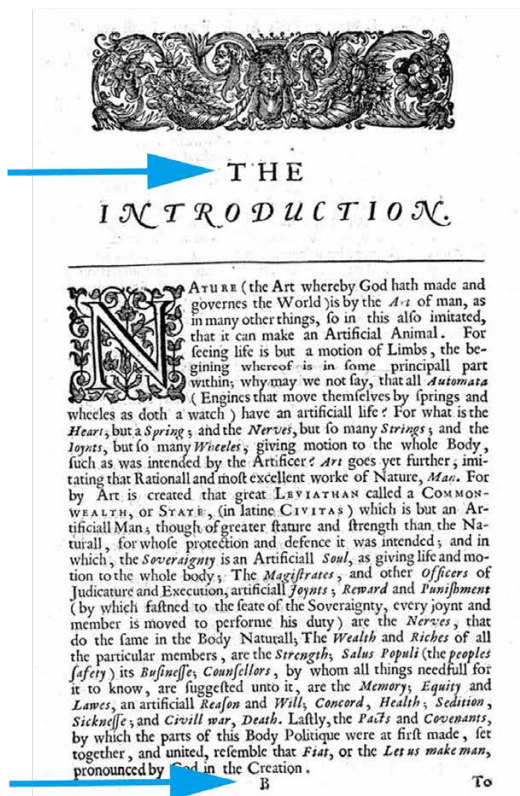


図3: Leviathan, 1651. A4'の修正前
(名古屋大学附属図書館)

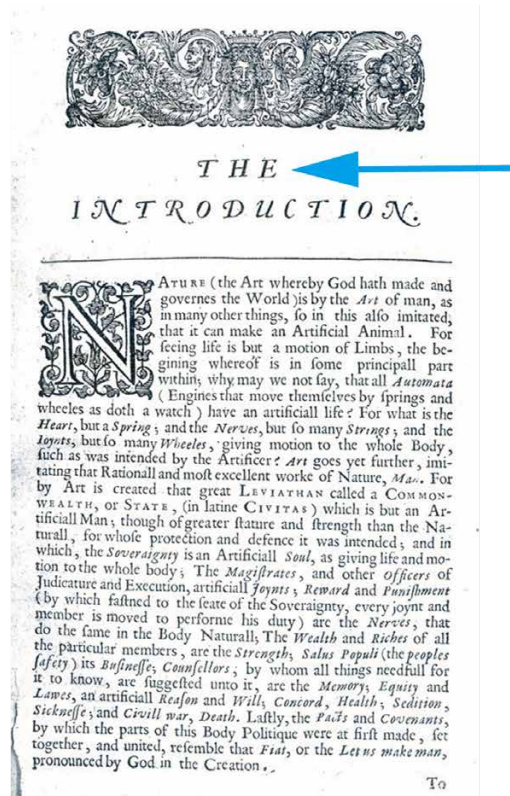


図4: Leviathan, 1651. A4'の修正後
(名古屋大学附属図書館)

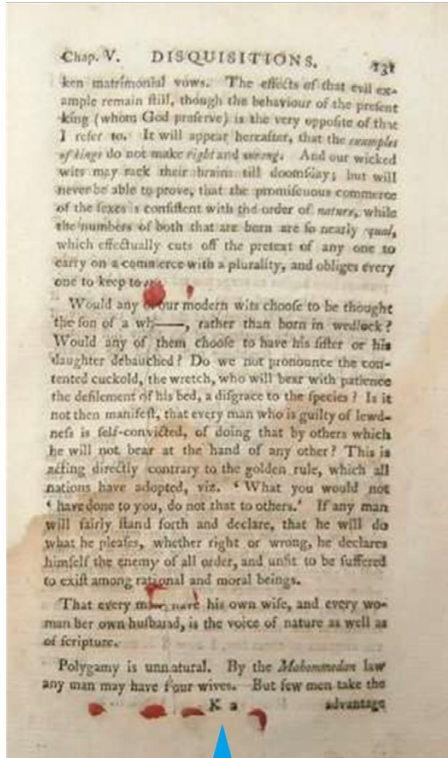


図5: *Political disquisitions* 第3巻のK2
(名古屋大学附属図書館)

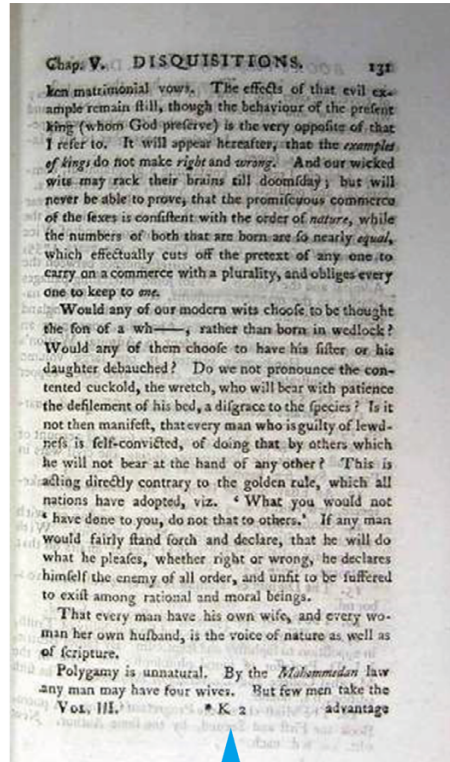


図6: *Political disquisitions* 第3巻の*K2
(名古屋大学附属図書館)

と差し替えられた本もある。

校正には大規模なもの小さなものがある。前者の例としては前述の *Political disquisitions* がある。この本の修正前は1ページに32行(図7)であったが、修正後は30行(図8)に文章が減っている。ここまで大きな修正は著者の主張にかかわることが多いので、既に刷り上がった紙葉を差し替えて主張の統一を図るはずである。にもかかわらず、未修整の本(図7)が見つかる。未修整の紙葉が徹底して回収されないどころか、逆にそれらも使って本として束ねられている。校正の統一が問われる反面、おかげで著者の思想の変化を捉える機会にもなっている。

もう一つの手直しが *Leviathan* のように小さな修正である。通常は校正で直されるが、時には印刷機の稼働中に間違いに気付き印刷作業を中断して修正する「稼働中断修正(stop-press-correction)」もある。これを異刷(state)という。スペル間違い、表記間違い、ノズル付け違い、フォント違い、オーナメントの使用間違いと言った小さな修正であり、本文の主張に影響を及ぼしたりしない内容のことが多い。そのためこうした修正は気付けば直すが、既に刷り上がっている紙葉まで修正するほどではないという緩い考え方をしている。洋古書のどれか1冊を手

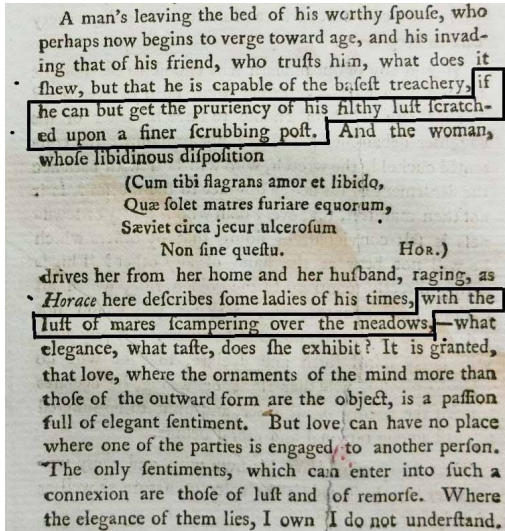


図7：Political disquisitions
第3巻のK2'の削除予定の部分
(線で囲った部分)
(名古屋大学附属図書館)

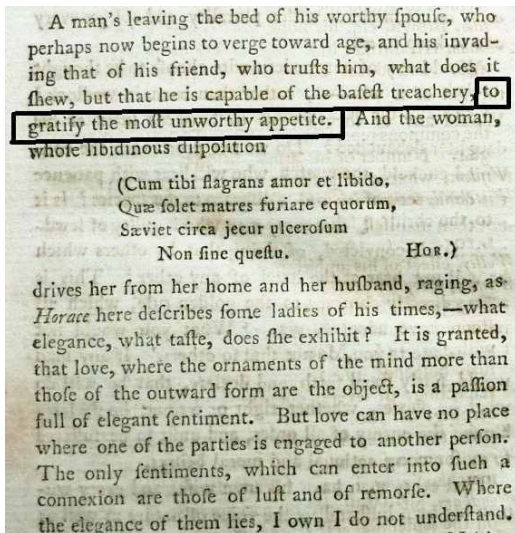


図8：Political disquisitions
第3巻の*K2で、削除後に文章を追加した部分（線で囲った部分）
(名古屋大学附属図書館)

にしても、他の同じ本の代表になれないのにはこうした理由がかくされていたのである。名古屋大学附属図書館の水田文庫やホップズ文庫はこうした本の宝庫であり、本稿で取り上げる例もそこからの借用である。

こうした本を前にしたとき、目録は本を書名＋著者名＋ページ数＋出版年を持って識別し、本全体を一つの塊としてとらえて表示する。しかしこれでは洋古書の変動の様子を表示することは出来ない。そこで識別の精度を上げるために「1紙葉単位」に表示すると共に「本の紙葉全体を一覧」できる方式を採用した。折記号を使った表記法（校合式）である。こうした表示をしなくても、紙葉の異同は文章で説明出来る。しかし一覧は出来ないの、全体像をつかみにくい。本を識別表示する時、校合式の利便性を上回る表示方式は現在のところない。例えば、

図5と図6に示したK折丁の変動の様子は

$K^8(-K2 + *K2)$ そして巻末では $Kk(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3=*K2))$

と記述すれば、K折丁の2枚目の紙葉K2を削除し、代わりに*K2が挿入されたことを示す事が出来る。しかも挿入紙葉(*K2)がKk折丁で印刷されたことも一目でわかる。この点については第10項で扱う。

しかし変更が見つかって、紙葉単位の変更でなければ、変更の様子を折記号で表記することは出来ない。前述した *Leviathan* の THE (INTRODUCTION) の変更は紙葉の変更を伴わないので、こうした変更は注記で説明するしかない。

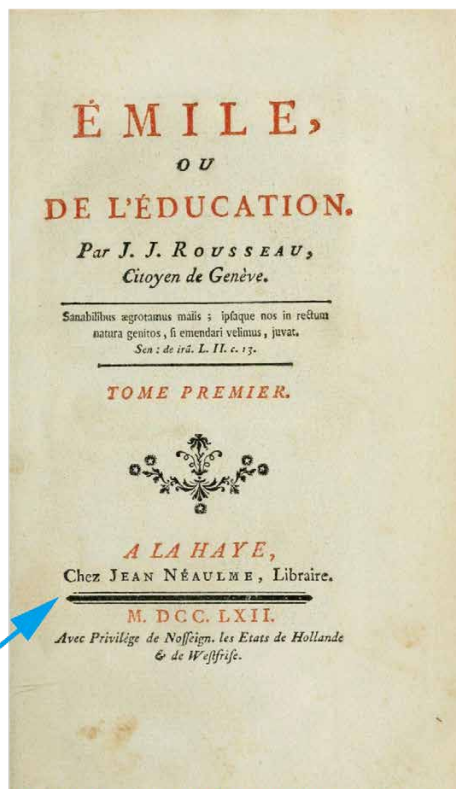


図9：中央揃えでない三筋罫
 (『エミール』(パリ版) タイトルページ)

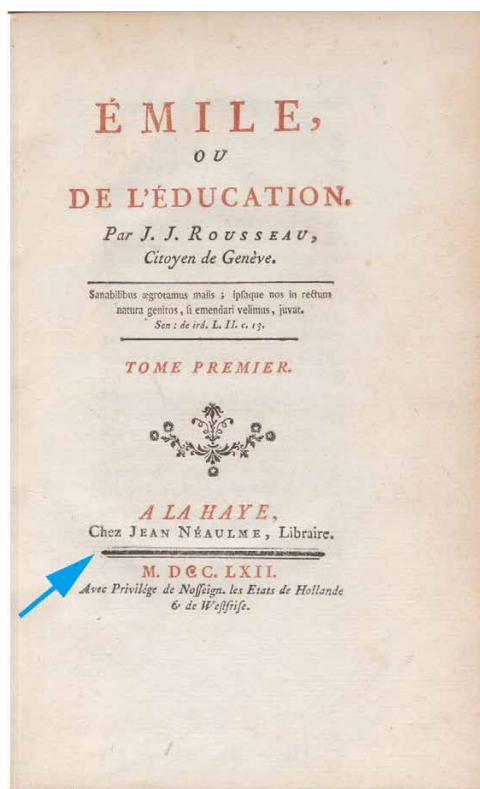


図10：中央揃えの三筋罫
 (『エミール』(パリ版) タイトルページ)

もっともタイトルページで異刷が見つかった場合、異なった扱いをすることがある。ミルトン (John Milton) の『失樂園』(1667年)は初版第1タイトル、初版第2タイトルなどと言った名称を付けて区別することがあるからである。同じ事はルソー (J.J. Rousseau) の8折判『エミール』(パリ版)の第1巻タイトルページにも言えるかもしれない。この本では出版事項の中の三筋罫が中央揃えになっていない本(図9)と、中央揃えになっている本(図10)とがある。前者が最初の印刷であり、後者が後刷りになる(注4)。

2. 折記号の表示形

では紙葉単位に変動の様子を伝えることの出来る折記号とはどんな工夫で、どんな特徴を備え、どのように用いるのであろうか。

本を作るには大きな紙に複数のページを並べて印刷する。印刷後、それを折り畳むと一対の紙葉の束が出来る。これを折丁という。そしてこの束を順番に並べていくと本が出来るが、並べる作業を効率よく行うために折丁ごとに順番を示す記号が1つ付けられる。それが折記号である。この記号は折丁ごとに付けられ、折記号が異なれば別の折丁になる。

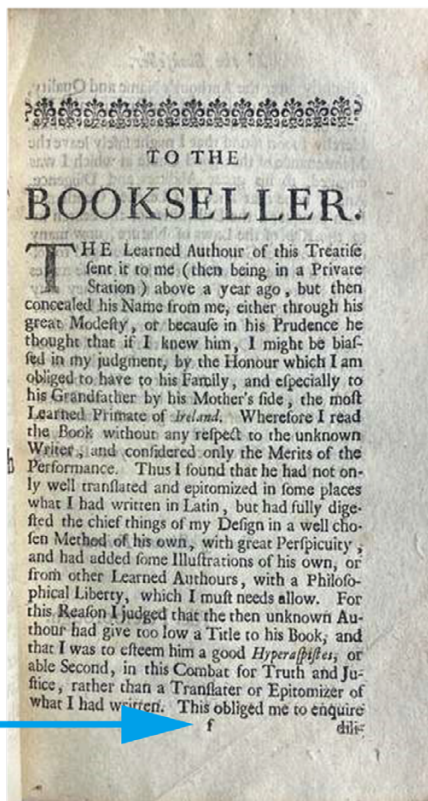


図 11 : pica の折記号 (f1)
(名古屋大学附属図書館)

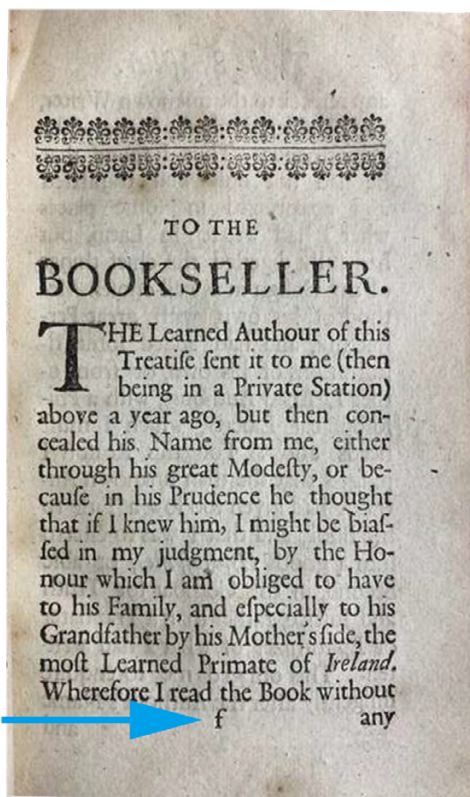


図 12 : great primer の折記号 (f1)
(名古屋大学附属図書館)

折記号にはアルファベットや数字さらには記号類も使われている。A, B, C とか 1, 2, 3 などには識別機能と順番機能を備えている。しかし *, †,)(といった記号類は識別機能を備えていても、記号同士を順番に並べる機能はない。そのため、表示順が並び順になる。*, †,)(と表示されていれば、それが順番である。

折丁は折記号によって、紙葉はそれに加えて紙葉番号によって識別される。アルファベットには大文字と小文字があり、これらは別々の折記号となる。それに大文字あるいは小文字とい

う文字の形態は同じでも、ポイント数が異なれば、別の折記号となる。例えば、折記号が pica (図 11) と great primer (図 12) の小文字で表示されていれば、両者は別の折記号になる。折記号だけを見ても違いには気付きにくいかもしれないが、折記号はそのページの本文活字の大きさに合わせて表示されるので、折記号と同じ大きさの活字で本文ページが示されていれば、大きさの違いには気付くはずである (注 5)。但し、Aa、Aaa のような、大文字+小文字の形で折記号が表示される場合、小文字は大文字を使い切ったために使われたとみなす。そのためそれらを校合式に記述するとき、大文字の後に使われた小文字は大文字で記述し、AA、AAA のように記述することになる (注 6)。

3. 折記号の表示場所

折記号とは製本師が折丁を並べるのを助けるための工夫 (丁合取り) であり、本文ではない。そのため本文と区別して、ページの下部欄外の行に本文と同じ大きさの活字で表示される。この行にはページ数やつなぎ語も表示されることがある。これらは行の端に示すので、折記号はそれらと区別して、行の真ん中付近に表示されることが多い。図 13 では折記号の示された行の右隅につなぎ語が表示され、ページ数はランニング・タイトルの行にある。



図 13 : 折記号 (D1)

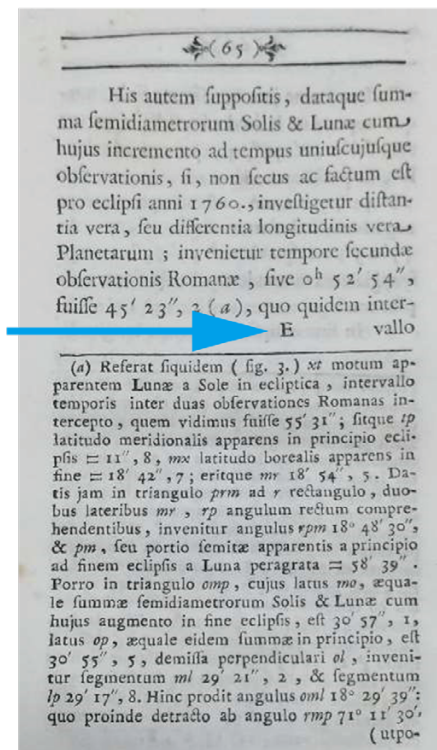


図 14 : 本文と注との間の折記号 (E1)

しかし表示場所が下部欄外であっても、最下行とは限らない。注記があったりすると、本文と注記との間に示されることもある。そうした場合、折記号が付いていないように見えるので、注意が必要である。その例が図 14 である。

4. タイトルページの折記号表示

折記号は折り目でつながった 1 対の紙葉の左側の紙葉に表示されることが多い。しかし折り目の左側にあっても、折記号のほとんど表示されない特殊な紙葉のページがある。タイトルページである。なぜタイトルページには折記号がほとんど表示されていないのであろうか。

タイトルページは本文ページではない。しかし文字が印刷されていることから、本文ページに準じたページになる。加えてタイトルページには版面の中央で表示を整える「中央揃え」という表示原則がある。この原則にも従うことになると、折記号の表示位置は下部欄外の中央になる。その例が図 15 の折記号 A である。図では折記号を含めたすべての表示が中央揃えになっている。おかげで折記号 A は非常に目立った存在である。にもかかわらず、折記号はタイトルと無関係であるばかりでなく、一般の読者にとって意味不明な表示である。とって折記号はタイトルの関連情報でもないの、図 16 の「(*)」のように、遠慮して中央からずらして

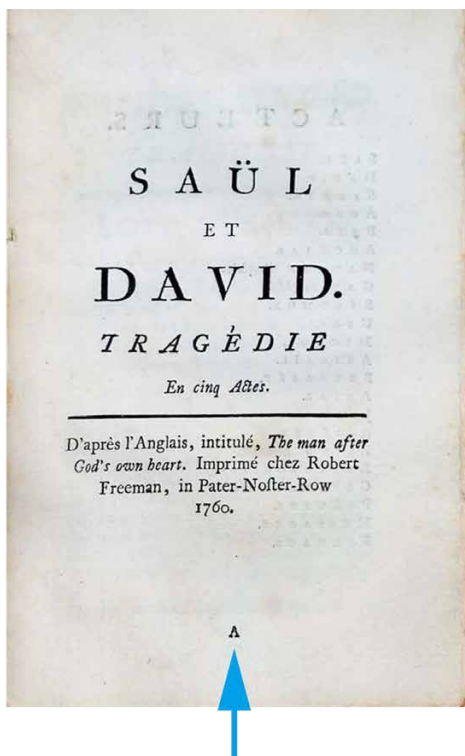


図 15：タイトルページで中央揃えで表示された折記号
(名古屋大学附属図書館)

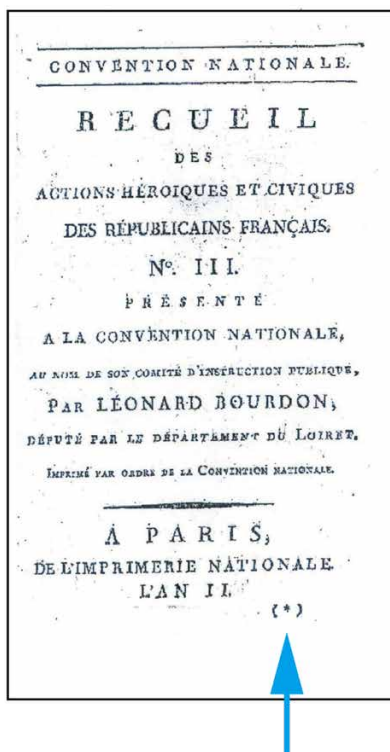


図 16：タイトルページで
右寄りに表示された折記号

表示すると、「中央揃え」の原則をくずすことになり、これまた目立った表示になってしまう。折記号をタイトルページに表示するには問題が多いことがわかる。

本文ページの場合、版面いっぱい本文を表示するので、どのページも類似して見える。そのため、本文ページの折丁は折記号を付けないと素早く並べにくい。それに対してタイトルページは文字数が本文ページより少ないだけでなく、中央揃えで表示されているので、折記号を付けなくても容易に識別できる。こうしたことからほとんどのタイトルページは折記号なしで済ませ、折記号の表示されている例は少ない。

5. 白ページの折記号

そのほかにも折記号の表示されにくい紙葉がある。白紙である。白紙には折記号の表示規定がない。文字が印刷されていないので、下部欄外という場所が存在しないからである。白ページの多くには折記号が付いていないが、付いている場合でも、折記号の大きさ、表示場所は様々である。とは言っても、白ページへの折記号付けはタイトルページへのそれとは全く反対の形でなされている場合がある。タイトルページでは目立つと困る。それに対して、白ページでは小さく表示すると、見落とししかねないため、目に付くように表示されていることもある。図 17 はその 1 例であり、図 18 となると、遊びが入り、しっかりと目立っている。白紙に折記号が付いていれば、それは折丁中の必要な紙葉となる。しかし白紙に折記号が付いていなければ、白紙が折丁にとって必要な紙葉かどうかは綴じ目でのつながり具合などを調べて判断することになる。



図 17：白ページの折記号 (Aaa1)
(名古屋大学附属図書館)

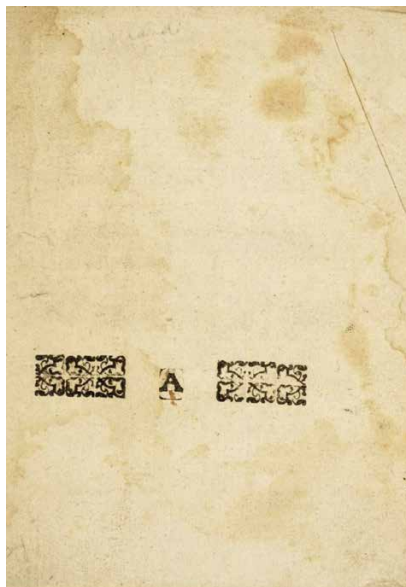


図 18：白ページの折記号 (A1)

6. 1 折丁 1 折記号 1 折り目：折丁の要件

図 19 は通常の手順で初めて印刷し、折り畳んで作られた 8 折判であるが、この図は色々の判型の折丁に共通する要件を示している。図の場合、折記号は 1 つ (A) である。紙葉数は 8 枚であるが、A1 と [8]、A2 と [7]、A3 と [6]、A4 と [5] は折り目でつながった 1 対の紙葉の状態にあり、しかもそれらは「1 つの折り目で束ねられている」。

初めて印刷し、「折り畳んだ」とは、8 折判であれば、1 枚の紙を所定の手順で 3 回折り畳み、その折り目で束ねられた状態を指す。4 折判であれば、2 回折り畳み、折り目で束ねられた状態である。

折丁がこのように作られることから、この条件に基づいて折丁を折記号で表す規則が定められている。その代表的な表示が右肩数字を付けた A^8 である。従って A^8 という表示にはこの項の冒頭で述べた条件がすべて含まれていることになる。1 折丁、1 折記号、1 折り目であり、これが折丁の要件になる。そして 1 折丁は A^8 のように 1 表示で表し、2 表示にはしない。2 表示にすると、1 つは別の折丁になってしまうからである。

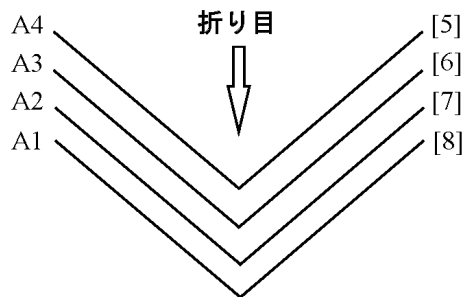


図 19：折丁中の紙葉の姿

図 19 を表示すると A^8 になるが、 A^8 と表示出来るのは 1 枚の紙を 3 回折り畳んで作る 8 折判だけではない。1 対の紙葉が「通常通りに折り畳んで束ねられていれば」、2 折を 4 つ重ねても (2° in 8's)、4 折を 2 つ重ねても (4° in 8's)、16 折の半裁 (16° in 8's) であってもかまわない。ただし右肩数字は常に偶数でなければならない (注 7)。

7. 1 対の紙葉の折記号表示方法

紙葉が折り目でつながっていることを示す方法は 2 種類ある。折り目でつながった紙葉をまとめて表示するときは右肩数字を使う。それに対して各紙葉のつながっている様子を 1 枚ずつ視覚的に示すのがピリオドである (図 20)。

A1.A2.A3.A4.[5].[6].[7].[8]

図 20：紙葉のつながりをピリオドで表示

右肩数字、ピリオドの両表示とも紙葉のつながり具合がわかりにくいかもしれないが、総紙葉数の半分のところに折り目があると思えば、各紙葉のつながり具合は理解できるのではないだろうか。

A3.A4.A5.[6].[7].[8]

図 21：紙葉番号 3 から始まる紙葉の表示

右肩数字は紙葉をまとめて表示するのに便利である。他方、ピリオドは紙葉の姿を 1 枚ずつ見せることができる。加えて、ピリオドは右肩数字では表示できない紙葉の状態を示すことも出来る。右肩数字は紙葉番号が 1 から始まる場合しか使えないが、ピリオドは紙葉番号が 1 から始まらなくても良いからである。

図 21 では折丁の紙葉番号が A3 から始まっているが、全体で 6 紙葉なので、上記のように表示すれば、各紙葉が折り目につながっていることを示すことが出来る。そしてピリオドで表示をしても、例えば図 21 であれば、この 6 紙葉が A⁶ の「6」と同じ機能を果たしていることは言うまでもない。

右肩数字とピリオドはそれぞれに長短があるが、問題のない折丁の記述をするのにピリオドを使うと、手間がかかるばかりでなく、表示が長くなるので、表示スペースの無駄使いである。紙葉番号が 1 から始まっていれば、折丁の紙葉（数）は右肩数字で表示する方がよい。

折記号は折丁ごとに付けられるが、すべての紙葉に折記号が表示されることはない。折り目の右側の紙葉にまで折記号付けされている場合もあるが、多くは「折り目の左側の紙葉」に表示することですまされている。それを図示したのが図 19 である。図の場合、折り目の左側の紙葉には折記号が A1、A2、A3、A4 と表示されている。右側の 4 紙葉には折記号がないが、それらは折り目の左側の紙葉とつながっていることから、A5、A6、A7、A8 と呼ぶことが出来る。図 19 では折記号が左側の紙葉にすべて付いているが、左側の最初の紙葉に A とだけ表示され、それ以外の紙葉には折記号が表示されていなくても、最初の紙葉は A1、それ以降の紙葉は A2、A3、A4、A5、A6、A7、A8 と呼ぶことが出来る。この場合は 8 折であるが、2 折でも、4 折でもあるいはその他の判型であっても、折り目につながった紙葉の束であれば、折記号と紙葉番号の数え方は同じである。

折記号付けが折り目の左側の紙葉だけですめば、手間が省ける。しかしこの方法だと、図 24 の場合、1 つ目の束の折り目の右側の紙葉は折記号上で存在しない紙葉になってしまっている。従ってこの折記号付け法は 1 折丁 1 折り目の場合にのみ適用される特殊な折記号付け法といえる（注 8）。

8. 1 折丁 2 折記号 2 折り目：「後から」加えられた紙葉

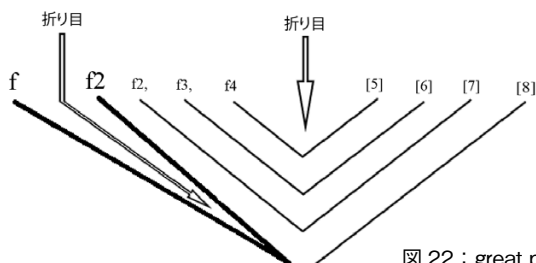


図 22：great primer **f** の紙葉が挿入された pica f 折丁

これまで折記号がどのように表示されているかを見てきた。しかし折丁が常に予定通りに作られているわけではない。紙葉がどのように作られているかを折記号を使って解決を試みてみよう。

折丁を調べていくと、妙な折記号付けに出会うことがある。*A brief disquisition of the law of nature* by James Tyrrell (1692) の pica f 折丁では、図 22 に示したように、折記号 f2 が重複して付けられているように見える。

f f2 f2 f3 f4...

この折記号付けについては図 11 と 12 に示したように、活字の大きさが違うので、重複した折記号付けではなかった。

図を見ると、1 つ目の束は折記号 great primer **f** が付き、2 枚の紙葉が折り目につながっていることから、折り目が 1 つある。2 つ目は 8 紙葉、1 折り目の pica f 折丁であるが、pica f1 は削除されているために、8 枚目は折り目につながっていない単独の紙葉になっている。great primer **f** は削除紙葉の pica f1 と折記号文字が同じなので、削除紙葉の折記号を示すと共に、文字の大きさ変えることによって、pica f1 とは別の折記号であることも示している。従って 1 つ目の束 (great primer **f**) は pica f1 に対する差し替え紙葉であることが判る。前述の例では削除紙葉の折記号 K2 (図 5) にアスタリスクを付けて *K2 (図 6) と表示し、挿入紙葉の折記号にしていた。図 22 ではその代わりに活字を大きくすることで、別の折記号にしていたことになる。

図 22 では折り目が 2 つ出来ていたが、1 つは後から追加された挿入紙葉の折り目なので、初めて作られた f 折丁は折り目が 1 つとすることになる。この点の詳細については注 8 を参照してほしい。

こうした折丁を折記号で表示する場合、最初に作られた折丁の全容を示し、次いで変更があればその様子を丸カッコ内に表示すればよい。

pica f⁸(-f1+f²)

図 22 の変動の様子は折記号の異同から判断できるが、その様子を目に見える形で示している折丁が見つかった。図 23 (注 9) である。図 23 には挿入予定の紙葉と削除予定の紙葉の両方が残っているからである。

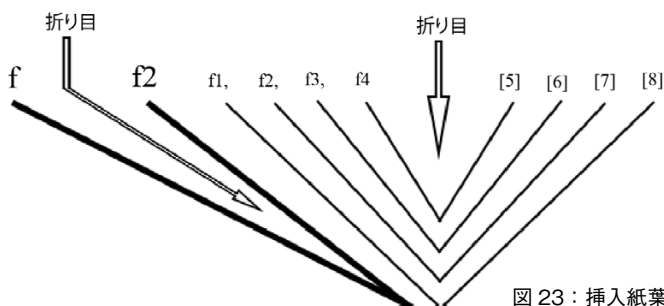


図 23：挿入紙葉と、削除予定の紙葉が表示された折丁

9. 1 折丁 1 折記号 2 折り目：現在の規則では表示できない折丁

図 22 では折記号の重複が疑われる例であった。今度はその逆に紙葉の存在を無視した折記号付けがなされている例である。その本とは *Elementa philosophica de cive*. Auctore Thom. Hobbes. Amsterodami, apud Henr. & Viduam Th. Boom (1742) であり、下記のような折記号付けになっている。

** , [1 紙葉], **2, **3, **4, **5

問題の折丁は ** であり、折り目を含んだ形で示すと図 24 の通りである。図は 2 つの束からなり、折り目は 2 つある。しかし折記号は 1 つなので、1 折丁である。2 つ目の束は紙葉番号が 2 から始まっているが、すべて 1 対の紙葉なので、2 つ目の束には欠けた紙葉がない。1 つ目の束は 2 つ目の束のいずれかの紙葉を削除し、その代わりに挿入されたのではなく、最初から 1 つ目の束として作られていることが判る。

図 24 は 2 束、2 折り目であるにもかかわらず、1 折記号なので、「折丁の要件」とは異なる折丁になる。従って図 24 は既存の表示規則では対処できない折丁になる。

図 24 にはもう 1 つ問題になる部分がある。折記号付けである。2 つの束はいずれも「折り目の左側の紙葉」に折記号番号を付けている。おかげで **2 という折記号 (と番号) は 2 つ目の束の 1 枚目 (実際には 3 枚目) に付けられ、1 つ目の束の 2 枚目の紙葉は折記号上は無視された紙葉にされてしまっている。「折り目の左側の紙葉」にのみ折記号付けする方法は 1 折丁 1 折り目の場合にのみ有効な折記号付け法であり、2 折り目の折丁には用いてはならない折記号付け法になる。この点からも現在の折記号表示規則が 1 折丁 1 折り目という前提で規定されていることが判る。図 24 の折丁については注 10 を参照してほしい。

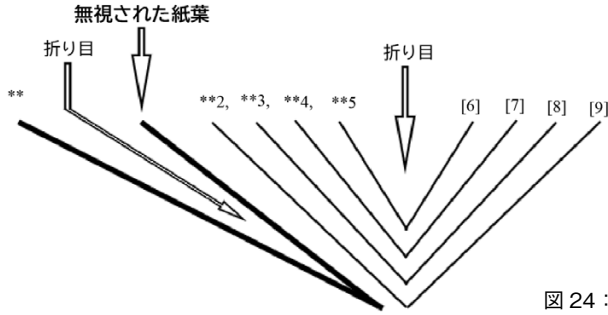


図 24 : 1 折丁 1 折記号 2 折り目

図 24 は 2 束のため 2 表示になってしまう。1 折丁は 1 表示なので、1 つの束として表示するには、両束共通の折記号を見出しにし、内訳を丸カッコ内に表示することで、同じ折記号の 2 束を 1 単位で表示出来る。

(2, **2.**3.**4.**5.6.7.8.9)

前述の 2 例は折記号付けの異常から、折丁の様子を解明できた。ところが次の例は折記号などを駆使しても折丁の様子を解明できない。それが *Political disquisitions* by James Burgh (1775) の最後の 3 紙葉である (図 27)。図 27 は本屋が出そうとした形なので、多くの本はこの折丁になっている。しかし幸いにもこの 3 紙葉の誕生を物語っている折丁の本が 1 点見つまっている。図 25 (注 11) である。

Kk 折丁は最初 4 折 (図 25) で作られたので、1 対の紙葉が 2 つ「重ね」られている。通常、これで折り畳みが完了し、本として綴じられるはずであった。ところがこの折丁の場合、更に一手間かけられた。「重ね」られた 1 対の紙葉を「並列」にし、さらに 1 紙葉を削除したからである。図で言えば、図 25 から図 26 への変更である。この例は Bowers が述べている「印刷型」(printing formula) と「発行型」(issue formula) に該当する。図 25 は四折で印刷した「印刷型」そして折丁中の紙葉を配置換えした図 27 は「発行型」になる (注 12)。

Kk 折丁は 1 対の紙葉 2 つを並列にしたことから、折り目も 2 つできてしまった。しかし折記号は 1 つなので、この折丁も図 19 とは異なった姿になっている。従って Kk 折丁も、図 24 と同様に、現在の表示規則では処理できない折丁になる。この折丁の詳細については注 13 を参照してほしい。

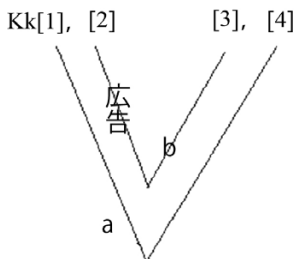


図 25 : 変更中 1

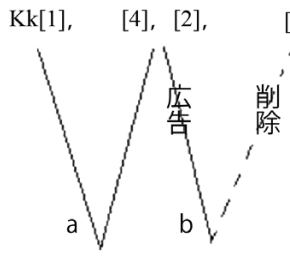


図 26 : 変更中 2

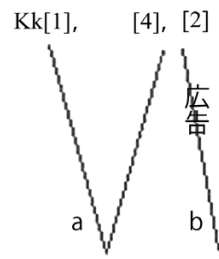


図 27 : 変更の完了

注 : 「削除紙葉」には *K2 の折記号がある。

従って前述の *Elementa* と同様に、この折丁も丸カッコで表示することになる。

Kk(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3))

削除紙葉には *K2 という折記号が印刷されているので、それを含めて表示すると、下記のようなになる。

Kk(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3=*K2))

第2項で K 折丁の差し替えについて述べた。そこでこの本での変更の様子を示すと下記の通りである。

A⁴ B-2I⁸ K⁸(-K2+*K2) L-2I⁸ 2K(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3=*K2))

最後の Kk 折丁が複雑に作られていたが、それは K2 の紙葉に対する差し替え紙葉(*K2=Kk3)を作るためであったことが判る。

折り目が2つ出来る折丁については前述した通りである。この形の折丁は2種類あるので、1折丁に2つの束、2つの折り目がある場合、下記のように見分ける必要がある。

1. 両束の折記号が異なっていれば、どちらかの束は後から加えられた束なので、通常の規則で処理できる。
2. 両束の折記号が同じ場合はこれまでとは違った作りの折丁になる。

A brief disquisition の場合は図 23、*Political disquisitions* (第3巻) の場合は図 26 という具合に通常見かける折丁とは違った折丁が見つまっている。特に後者の場合、多く出回っている本の折丁だけを見ている限り、その折丁の本当の姿を解明することは出来ない。本稿で提示した1点(図 25)は折丁の姿を解明したばかりでなく、本作りの多様性をも示す内容を含んだ貴重な存在である。洋古書は同じ本でありながら、様々な姿をしている。これを欠点としてとらえるより、利点と理解し、本作りの様々な問題を解決する糸口として活用する必要がある。そのためには洋古書の存在を知らせる目録作成という地道な努力が不可欠である。

図版の所蔵一覧

- 図 1. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Mizuta-0012
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004471.pdf>
109/209
- 図 2. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Mizuta-0012
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004471.pdf>
121/209
- 図 3. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Mizuta-0012
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004471.pdf>
9/209
- 図 4. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Hobbes I-156
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004468.pdf>
9/211
- 図 5. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0272
- 図 6. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0269
- 図 7. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0272
- 図 8. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0269
- 図 9. *Emile* by J.J. Rousseau. 1762. Thomas Fisher Rare Book Library
<https://archive.org/details/amileoudeldu01rous/page/n7/mode/2up>
8/500 タイトルページ
- 図 10. *Emile* by J.J. Rousseau. 1762. Thomas Fisher Rare Book Library
<https://archive.org/details/amileoudeldu03rous>
11/400 タイトルページ
- 図 11. *A brief disquisition of the law of nature* by J. Tyrrell. London, printed and are sold by Richard Baldwin,
1692.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-1785
- 図 12. *A brief disquisition of the law of nature* by J. Tyrrell. London, printed and are sold by Richard Baldwin,
1692.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-1785
- 図 13. *Voyage de Siam des peres Jesuites, envoyes par le roy, aux indes a la Chine.* Paris, Ches Pierre Mortier,
1688.
- 図 14. *De solis parallaxi* ad Cl. Grandjean de Fouchy. Romae, ex Typographia Hermathenaea, 1766.
- 図 15. *Saül et David : tragédie en cinq actes : d'après l'anglais, intitulé, The man after God's own heart.*
Imprimé chez Robert Freeman, 1760.
名古屋大学附属図書館 135||ZIYUSISO||135.3||An.
- 図 16. *Recueil des actions heroïques et civiques des Republicains francais.* No.3...par Leonard Bourdon. Paris,
de l'Imprimerie nationale, L'an II.

- 図 17. *IIANΣEBELA or, A vie of all religions in the world.* London, 1672.
名古屋大学附属図書館 Mizuta-1489
- 図 18. *Three severall treatises concerning the truce at this present propounded.* 1630.
<https://archive.org/details/threeseveralltre00west/page/n5/mode/2up>
6/44.

注

1. Gaskell, P. *A new introduction to bibliography.* Oxford, Clarendon Press, reprinted with corrections 1979. p. 116
2. 高野 彰「トマス・ワレン：『リヴァイアサン』（ヘッド版）の印刷者」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 13 号（2019）p.7。データベース ESTC は 1651 年のヘッド版 Leviathan の書誌の注記を下記のように表示している。
Printed by Thomas Warren (sig. A-2B⁴) and Richard Cotes (sig. 2C-3D⁴) according to Akira Takano (see: *Annals of Nagoya University Library studies*, v. 13, 2016, p. 1-17) . Previously, the printing through quire 2B was wrongly attributed to Roger Norton instead (see: *Thomas Hobbes: Leviathan*, ed. Noel Malcolm, vol. 1, p. 211-)
3. 前出。高野 彰「トマス・ワレン：『リヴァイアサン』（ヘッド版）の印刷者」pp.1-17.
4. 高野 彰「『エミール』初版（パリ版）のタイトルページの印刷」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 16 号（2018）pp.1-9.
5. 高野 彰「折丁：その要件」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 18 号（2020）pp.2-3.5.
Bowers, F. *Principles of bibliographical description.* New York, Russell & Russell, reissued, 1962. p. 205.
6. *op. cit.* Bowers, F. *Principles of bibliographical description.* pp. 205-7.
7. *op. cit.* p. 226.
8. 前出。高野 彰「折丁：その要件」p.4.
9. 同上 pp.2-3 図版 23 (*A brief disquisition of the law of nature* by James Tyrrell (1692)) の所蔵館は名古屋大学附属図書館 (Mizuta-1785) である。
10. 同上 pp.5-6
11. 下記は折丁の記述について述べている重要な本や文章である。しかしこれまで「初めて」作られた折丁が「折り目を 2 つ」持っていることについて触れている文章はない。
Bowers, F. *Principles of bibliographical description.* New York, Russell & RuReissued, 1962.
McKerrow, R.B. *An introduction to bibliography for literary students.* Oxford, Clarendon Press, 1927. pp. 155-163.
Gregg, W.W. 'Formulas of collation' *A bibliography of the English printed drama to the Restoration.* Vol. 4. Excursus IV, pp. cxlviii-clviii.
Tanselle, G.T. 'Title-page transcription and signature collation reconsidered' *Studies in bibliography.* Vol.38. 1985. pp. 45-81.
12. *op. cit.* Bowers, F. pp. 197-8. James Burgh の *Political disquisitions* (1775) の所蔵館は名古屋大学附属図書館の Mizuta-0272。
13. 高野 彰「James Burgh の *Political disquisitions* (1775)」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 17 号（2019）pp.1-6.